



面観音像」に手を合わせ、安曇野で生まれた高校の先輩に対して冥福を祈りたくなるからです。

安曇野生まれの彫刻家の友が癌で亡くなった日は平成十六年三月二十五日のことであった。

昨年の四月末の確か連休前に、突然その男の訃報に接し私は少なからず動揺した。彼と美術界同業の旧友が男の急逝を信州から知らせてきたからだ。坂北村の実家をアトリ工と称し、絵を描いていた貧乏画家のその旧友も、流石にショックを隠しきれず、何時に無く早口で私にその男の死を電話口で告げていた。

訃報を知らせてきた旧友も私も、大学に入ってから、谷中の幽霊でも出そうな彼の下宿で共に世話になったことがある。上京の折、私はそのあばら家に泊まり、互いに独身時代の夢を語り合った間柄であったからだ。それなのにその男は、大学院卒業後四十年余、ひたすら石を刻み続け、私に黙って逝ってしまったのか？

確認のため、男の自宅に電話したが細君は留守であった。直ぐに、彼の仲間や弟子達の溜り場を思い出した私は、厚木市にある彫刻工房に電話をした。電話口に一人息子が出た。息子も東京芸大卒業の親子二代にわたる彫刻家である。逝去の日を知った私は、葬儀を知らされなかった無念さを息子に告げた。

その夜、細君から電話があった。高校の同級生同志の結婚で、細君のことも良く知っていた私は「何故知らせてくれなかったのですか！」と彼女の気持ちや付度できずに、つい非難めいた口調になっていた。細君はしきりに詫びながら小さな声で「何時かお線香を上げに来て下さい。」言葉少なに電話を切った。

私は連休に入ると直ぐに、男の霊前に焼香に行こうと思いつき、都合を問う電話を自宅にしたのだが、何時掛けても細君は留守であった。夫の喪もあけないのに、旅行にでも出掛けたのか？とその不謹慎をいふかり、些か呆れながら、仕方なく手紙を添えた現金書留の封筒で、男の七七忌前に香典を届けた。程なく、香典返しの子の挨拶状と、お茶の包に添えた細君の手紙が、宅急便で届いたのは、連休明けのまるで初夏を思わせる暑い日のことであった。

お心使いありがとうございました。

五月二日ふるさとの寺で彼の納めた十一面観音像の守る場所ので七日の法要を済ませました。安曇野は春の最中でした。山麓の庭に少しだけ彼の灰をまきました。彼が愛して止まなかつた安曇野と共に眠る彼になりました。十二日の四十九日にあたる日に、こちらの墓所となる寺にお骨をあずけます。こうやって夫は、だんだんと心の中の存在に変化していくのです。よき友としてほんとうにありがとうございました。どうぞこれからもご親交ください。折がありましたら線香をあげてやって下さい。私も少しづつ元気になつて自認していた”自立する女”に戻りたいと思っておりますが・・・季節の変化の早さに驚かされます。ご自愛下さい。

文面を読んだ私は、山形村山荘に共に語らなから一夜を過ごしたことを懐かしく思い出して、彼が刻んだ観音もぜひこの眼で観ておきたい衝動に駆られた。寺の場所を息子から聞くと三郷村にとんだ。卯月の安曇野はまさに緑滴り、常念岳も霞んで

平成七年十一月十九日は、安曇野三郷村「瑠璃光寺」に安置した友人の彫刻家の遺作石像「十一面観音像」の開眼の日と聞いている。極最近、偶然にもこの石像に触れた文章を発見した。それは今話題のライブドアの題名も「信州安曇野から」といつブログであった。少なからず驚いた点は、後編の「友人が彼との思い出を随筆の」個所の文章クリックで私のHP「安曇野随想録」に飛ぶようにリンクを張っていたことである。始めに紹介して友の冥福を祈りたい。

【瑠璃光寺】前編

事務所近くに浄土宗の瑠璃光寺という寺があります。村の観光案内には載ってませんが、一般の人達が訪れることは余りありません。私は何故か引かれるものがありますと、ひとは赤い屋根の鐘楼の下が門になっていて、その全体の様が安曇野の閑静な田園風景にあつていて、路傍に立つ心が癒されるのです。さらにその寺の名前が、かつて訪れた小京都 山口市内にある瑠璃光寺と同じという所が思い出とともに何となく魅力があるのです。

【瑠璃光寺】後編

瑠璃光寺の鐘楼門をくぐり本殿に向う前庭の途中に「十一面観音像」の石像が建立されています。台座に作者の名前が刻まれていて「高嶋文彦」と読むことができます。残念ながら作者は若くして亡くなられました。友人が彼との思い出を随筆のかたちで追憶されています。私がウオ・キングの途中で瑠璃光寺に立寄るのは、この「十一

みえた。ネット検索で彼の名前を打ち込むと、彫刻界の「石の詩人」としての足跡が偲ばれる。作品に、素材の石を感じさせない素朴さと温かみと優しさを覚える。およそ田舎育ちの信州人らしからぬ詩を石材に丁寧に刻み込む、彼の叙情的マチユーが一体何処から生じたのか？

高校時代の応援団長の生一本な男臭さや、芸大時代の冬山を登る強靱な肉体に秘められた彼の原風景を、初めて安曇野の中に垣間見ることができたのである。後日、友をモデルに小説を執筆したいとさえ思ったほどである。

細君は、男のロマンに付き合って、彫刻では食えない彼を一生支え続けた。家内と一緒に新装なった練馬春日町駅の大根のレリーフや風船を持つ少女像、椅子や帽子を描いた作品を観に、銀座・横浜のアートギャラリーを訪れたこと、時には細君と一緒に、パーティに付合ったこと等を懐かしく想いだす。美術界に疎い素人の私でも、その男の死は日本の彫刻界にとって大きな損失だったのではと思う。これは私一人だけの身びいきであろうか？

細君の手紙によれば、友の灰を山形村の山荘の庭に撒いた由と聞く。何時かもう一度、今度は家内と二人で、三郷村の枝垂れ桜が美しい時期に寺を訪れ、遺作の十一面観音像を拝観し、彫刻家の魂の故郷安曇野に遊び、時間を掛けて散策してみようと思っている。この寺の名が高嶋家の菩提寺「瑠璃光寺」である。

「故高嶋文彦」君の一周忌に、墓所が開眼供養したと細君の手紙連絡が入り、友の作品ファンだった家内同道で墓参を兼ねて厚木の高嶋邸を訪問

した日は、晩春の四月二十六日のことであった。私の高校時代の友人は多くは無いのだが、私の結婚式に出席した友人三人の内二人は他界した。三人とも何故か芸術畑の人間である。東京混声合唱団所属だった一人の友人は、故郷で信州大学教職の傍ら「アルプス少年合唱団」を率い、毎年上高地ウエスタン祭に姿を見せていたのだが……

新宿から小田急小田原線に乗換えると、四十分程で本厚木駅到着。手向けの花を駅前花屋で購入。松蓮寺行きバスで約二十分。バス停で電話すると細君が道案内に出迎えてくれた。現われた細君は、気丈に笑顔で家内とも挨拶を交わした。過日銀座の画廊で開催された個展のオープニングパーティで実は、家内とも顔を会わせて居たのだが、細君は覚えていない様子もない。

彫刻家高嶋邸の門扉の上から、馴染みの蹲る石の猫が出迎えた。如何にもそれが彫刻家の邸宅風である。細君の案内のままに仏壇の遺影に向つて、一人で数珠を片手に夫々焼香を済ませた。家内が愛猫二匹と戯れる友の写真に気が付いてそれを話題にすると細君曰く「そんな猫ちゃん今もアトリエにいるのよ。」部屋に入っても至るところに、見覚えのある作品が無造作に置いてあった。赤御影石の猫や黒御影石の帽子が、大理石の白い机にさくらんぼが……生前アトリエに何度か邪魔したのだが、まるで自宅全体がアトリエのような雰囲気であった。何より安堵したのは時の折戻目となる細君が、

一人居の寂寥感を克服しているように見受けられたからだ。高嶋邸で、こうして「石の詩人」の世界を身近に満喫できたのは感激だった。

城山湖霊園「寶泉寺」に細君の運転で向った。墓所まで案内の細君は、運転しながら饒舌だった。久しぶりに、夫君の話を通じる友人の采訪が嬉しかったに違いない。やがて「フッフ」と泣き出すように降り出した小雨が、夕立の激しい降雨に変わった。「文彦は、晴れ男だったから、今迄雨で濡れたことがないのよ。着けばきつと止むわよ。」きっぱり断言する細君。我々は雨中の墓参を半ば覚悟したが、寶泉寺「境内で殆ど雨が上がり、不思議」と細君の予言は的中した。弟子が創ったという花台に家内が持参の花を手向けた。墓所は彫刻家の墓らしく、黒御影の涅槃の少女と白い大理石のベンチがまるでメルヘンの世界を演出していた。

雨上がりの路面は、今正に晩春の熱気で乾き始めの途上だったのだが……家内に促されて気を付けて眺めてみると、其処だけ渦状の白い湯気が舞上つて観えたのである。乗って来た車の前でその湯気はまるで思いを残す靈魂のように揺れ、何時の間に見られたのか例の蹲る門扉の猫が、湯気の中後ろ向きに座っていたからである。一人を慄然とさせたのは、この「寶泉寺の猫」であった。

細君はいぶかる我々に向つて「この寺には猫が多いのよ。こうして人に擦り寄ってくるのよ。」如何にも事もな気であった。でも家内は、激しい降雨が直前に止んだ事といい、あの揺れる湯気といい、今安曇野や山形村山荘界隈を逍遙する友の靈魂が、あの瑠璃光寺「からこ」寶泉寺」に降臨、出迎える猫が寄ってきたに違いないと思っただけである。二人ともその日は、帰途車中でも、帰宅後も偶然と思えない不思議な出来事が脳裏から離れなかったのである。合掌！

了

了

了